

教育セミナー（ランチョンセミナー）4

PMX-DHPの “誰に、いつ、どのように”を問う ：敗血症長期予後改善への鍵

日時

2025年6月21日（土） 12:40~13:40

会場

第4会場 ウィンクあいち 6F 「602+603」

座長

岡田 英志 先生

岐阜大学医学部附属病院 高次救命治療センター

演者

田中 智基 先生

滋賀医科大学 救急集中治療医学講座

血液浄化の気になる

論文紹介中！

東レ急性血液浄化ポータルサイト



<https://www.blood-purification.toray/medical-personnel/>

PMX-DHPの“誰に、いつ、どのように”を問う

:敗血症長期予後改善への鍵

滋賀医科大学 救急集中治療医学講座
田中 智基

2016年のSepsis-3の発表以降、敗血症に対する診療ガイドラインの整備が進展し、抗菌薬投与、輸液蘇生、血管収縮薬の使用といった初期治療の迅速な介入が臨床現場に定着しつつある。その結果、敗血症の短期死亡率は減少傾向を示している。しかしながら、初期治療に反応せず死亡に至る症例はいまだ一定数存在し、新たな治療戦略の確立が強く求められている。さらに近年では、短期生存率の改善に伴い、長期予後が検討可能となりつつあり、その実態は依然として不良であることが明らかとなっている。長期予後不良は患者個人のQOLのみならず、医療経済的観点からも重要な課題であり、これを見据えた包括的な治療方針の構築が急務である。

Polymyxin B-immobilized fiber column direct hemoperfusion (PMX-DHP) は、エンドトキシン除去を目的とした血液浄化法であり、敗血症性ショックに対する補助的治療法として注目されている。EUPHAS trialでは28日死亡率の有意な改善が報告された一方で、ABDOMIX trialおよびEUPHRATES trialでは有効性が示されなかった。特にEUPHRATES trialではMOD scoreおよびEndotoxin Activity Assay (EAA) 値に基づいて患者を選定したものの、全体としては予後改善効果は認められなかった。一方で、多くの観察研究において、特定の患者群に対するPMX-DHPの有効性が報告されている。年齢、疾患重症度、敗血症性急性腎障害 (AKI) の併存など、いくつかの臨床的要素を考慮した患者選定が予後改善に寄与する可能性が示唆されている。さらに、EUPHRATES trialのサブグループ解析では、EAA値が0.6以上0.9未満の症例においてPMX-DHPによる予後改善効果が確認されており、より精緻な適応基準の重要性が浮き彫りとなっている。加えて、PMX-DHPの有効性を最大化するためには、患者選定のみならず、施行開始のタイミング、治療時間、施行回数といった実施方法そのものについても最適化が求められている。

当院では、敗血症性ショックに対するPMX-DHPの有効性および最適な施行方法について、長期予後の観点から検討している。本セミナーでは、これまでの当院での知見とともに、PMX-DHPの最適な施行戦略について、最新のエビデンスに基づき再考し、今後の臨床応用に向けた展望を議論する。